



夜の先に

近藤 恵 / こんどう・けい
JAみちのく安達 二本松有機農業研究会

「忠臣蔵? 知りません」「君は日本人じゃないね。バカだね」。年末になるといつも、義理の父親に嘲笑されたことを思い出す。理系に偏った私は、歴史の面白さを感じることなく大人になった。

先日、歴史好きの妻が図書館から借りてきた本が棚にあった。ゴンブリッジ著『若い読者のための世界史』(2004年、中央公論美術出版)にはこんなことが書いてある。「この悪行についても、できることなら黙っていたい。しかし子どもたちもいずれば成長するのであり、彼らも歴史から、扇動や非寛容がいかにも容易に人間を非人間に変えるかを学ばねばならないのです」。

非人間とは刺激的な書き方だが、ナチスのユダヤ人迫害のことを言っている。ナチスといえば、被災地で売れ続けている本として、フランクフル『夜と霧』(みすず書房)が新聞で紹介されていた。絶望の先に光がある。難しい道ほど自分に多くのものをもたらす。ポジティブ思考で前向きになるようなごまかしは戒めよ。苦難を直視せよ。日本を覆っている暗闇は、光と

なりうる。扇動や非寛容が荒れ狂う今、効率化・自己責任の名のもとに弱者を搾取あるいは切り捨てようとする今、それは安易な道ではないが、暗闇とその先を見つめつつけることで成し遂げられる気がする。福島を経験からそう感じられたことは、今なお悲惨な状況下でのせめてもの収穫だった。

ゴンブリッジは原爆の歴史を述べた箇所でもこう続ける。「多くの人は人間をこの崖っぷちに追いやって元凶の科学を激しく非難したが、荒廃から立ち直らせ、正常な生活を期待以上に早く再開させたのも、学問と技術のおかげであったということも忘れてはなりません」。

福島を「がんばろう!」一色で染めたくはない。それは知らず知らずのうちに扇動に利用されるから。まだまだ知らない歴史に学び、フィリピンで学んだ適正技術を追求していきたい。ただしこの際、忠臣蔵は知らずにおいておくと思う。未来の義理の娘に「ナチス? 知りません」「君はバカだね」。と言わない寛容さを保つためにも。もうじき立春だ。■

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 23 2014.02.01

02	Relay Essay ポコポコ③ 夜の先に◎近藤 恵
03	【特集】変貌する世界と民衆交易が切りひらく未来③ 「自由」でも「保護」でもない交易とは? ◎大野和興 アグリビジネスに対抗するために◎印鑰智哉 農村地域をどう再生していくか—東北の現場から◎足田美津子 地域の社会づくりが豊かになる民衆交易を◎奥 万里子 自給的共同体をめざして—APLA/ATJへの提言◎秋山真良
12	【Topics】 シリア内戦の下で—イラクに流れ出すクルド系難民たち◎佐藤真紀 「痛み」を通して一歩踏み出す—APLA福島ツアーに参加して◎近藤有香
14	【Column】 Kakao Kita カカオ民衆交易奮闘記⑤ バブアの肝っ玉母さん◎津留留子 マイストーリー in ジャパン⑪ 【フィリピン】ユージン・アバンガンさん 微笑みの国から◎水と暮らす◎平河 夏 アジア現代文学あれこれ⑤ 『戦争の悲しみ』◎市橋秀夫
16	撮っておきアジア③ ラオス◎岩寄 円
17	APLA食堂③ 本物のオリーブオイルの味を知っていますか?◎赤石優衣、大久保ふみ、廣瀬康代
18	【Voice from APLA partners】 【東ティモールより】「水がなければ、生命もないよ」 【ネグロスより】KF-RC研修生ジョナンくんのその後
19	事務局だより

ベトナムと聞いて、皆さんが思い浮かべるのはどんなイメージでしょうか? ベトナム戦争があった貧しい国、米麺のフォーが美味しい国、民族衣装のアオサイが綺麗な国……。2030年には人口が1億人を突破するとみられているベトナムは、中間・富裕層の拡大に伴い、新たな消費市場として熱い注目が注がれている国でもあります。そんなベトナムの経済最大の都市であるホーチミン市に、旅行した際にこの布を購入しました。ベトナムでは、値段交渉は当たり前。交渉の末、お店の商売上手なお姉さんが安くしてくれました。日本では最近、ベトナムの食文化が入ってきているのをよく目にします。カフェでベトナムのコーヒーを取り扱うようになったり、コンビニでフォーや生春巻きが売っていたり、日本の私たちにとって、ベトナムは様々な面で身近な国になるかもしれません。(大久保なみ)

特集

【座談会】

変貌する世界と民衆交易が切りひらく未来③

僕

はまず、今の世界で起きている全体状況をきちんと捉え、そのなかで民衆交易がどのような意味をもつのかを打ち出していく必要があると思っています。自由貿易でも保護貿易でもない「交易」はあるのか? ということを考えてみたい。

今年度シリーズでお届けしてきた「民衆交易」論のまとめとして、APLA/ATJに関わる方々による座談会を開催した。貿易の自由化、生活・食の不安が広がるなかで、私たちは、対

案の軸をどこに立てるのか? APLAは、今後どのような方向をめざすのか?

大変な状況だからこそ、現状をしっかりと捉え、将来にむけた展望を切りひらきたいという思いで座談会に集まって頂いたが、立場は違っても、それぞれから具体的に展望をもった提言が多く出された。アジアの人びとをリネージュするAPLAの役割は今後ますます大きくなる。(編集部)



99%に隠された問題

しかし現在の世界は、もはや「貧しい南と豊かな北」では捉えきれない状況だ。「1%と99%」という世界共通の格差が生まれている。でも、99%の中にある構造的な差別、収奪的仕組みはまだはっきりと語られていない。たとえば、新植民地主義、都市と農村、正社員と非正規といった相対的な構造と、さらに、一番底辺に先住民民族の女性、その上に先住民民族、その上に農漁民や都市貧民、というように重層的な収奪の関係がある。

「自由」でも「保護」でもない交易とは?

大野和興 / おおの・かずおき
農業ジャーナリスト、本誌編集委員



わかりやすい例では、日本で働く外国人研修生の問題がある。時給300円、パスポートも取り上げられるという奴隷労働のような実態で、彼らを一歩利用しているのが農業だ。なかでも夕張メロン、川上村レタスなどブランド品を開発し、かつては学生アルバイト、現在は外国人労働者たちを使って、このような農業をすればTPPは怖くないという理論で大きな収益を上げている。中国、バングラデシュ、インドネシアの研修生たちに、脱走できないように色別の服を着せているという話も聞く。日本の農業者はTPPの被害者だが、同時に加害者にもなっている。さらに、先住民民族女性の立場に立てば、世界はもっと違って見えてくる。こうした重層的な問題は、単純に1%対99%という構造では見えきれない。

重層的・多層的に覆った自由協定網

グローバル資本主義のなかで国民国家、国民経済、国内市場が溶

…:というのとはオルタナティブではないだろう。その論理ではナシヨナリズム、排外主義が表に立ち、TPP反対のデモに日の丸が翻る、ということになる。自由貿易に對抗するのは何なんだ？ ということをきちんと考え直さなくてはいい。そして、「市場」とは何なのか？ を突き詰めなくてはいい。受け入れた、ということはどういうことなのか？ アベノミクスもそれで評価される。マーケット(市場)というのは群れとしての民衆をどう取り囲んでいくか、というものの。民衆交易がめざさなくてはいいのは「いちば」だろう。「いちば」というのは原初的な交換形態で、人が集まれば「いちば」ができるのは世界各国共通。狩猟民族、農耕民族がそれぞれ持ち寄った交換の原型だ。その考えをもとに現代の「いちば」を形成していくのだ。生協というの、生産と直結した交換の場というところであれば一種の「いちば」だろう。あくまで生産とつながっているもの。そうした「いちば」の復権ということを考えなくてはいい。イギリスのウィリアム・モリス(アーツアンドクラフツ運動の提唱者)は暮らしと労働とアートを総合的に再構成し、その視点にたった労働運動に自ら関わって

る。彼は、生産(自然と直結した労働)は喜びである、という。私たちの「いちば」論もそういう労働観を踏まえながら考えていきたい。池袋に大桃豆腐という三代続く豆腐屋がある。店売りに徹して、余った近所を売り歩く。遺伝子組み換え大豆を使わず丁寧な作り方をしている。スーパーに出して大量生産の方向に向かった豆腐屋はほとんどつぶれている。韓国でパルシステムと合同でシンポジウムを開催した時に、運動のために農村に入ったという46歳の女性農民に出会った。20年前は民主化闘争を担った学生で現在は韓国農女性会のメンバーだ。とてもおもしろかったのは、政府に対する闘いと同時に、自治体と協働する各地域の取り組み。韓米FTAで「地産地消」という言葉が使えなくなった今、自治体に最低価格補償の制度をつくらせたり、在来種の種子を集めて女性グループが蒔いていく活動をしている。タイでも同じことが起こっている。東北タイの女性たちが中心になって伝統品種を守り、有機農業を進めたり、農民学校を創って若者が稲作を勉強している。こうした地域の動きを結びつけながら、行政と協同して、新しい制度・仕組みを創る動きが各地で起こっている。

る。これらを横につなげながら、「貧しい南と豊かな北」を越えて、

なく、人と人、人と自然の関係・協働を新たに作り出すこと。それをどのような概念としてとらえるか。脱成長というのもひとつの考え方だろう。

では、交易とは何か。経済民主主義と分配の平等性というフェアトレード運動がいう公正な関係を、かつての世界の捉え方ではなく今

の世界の中で、どう取り戻していくのか、がひとつのかぎになる。

また、世界を席巻する自由貿易に反対するならば、保護貿易が答えとなるか。右派の経済学者たちは、「TPPは関税自主権を壊す。これは亡国に向かう。(だから保護貿易)」と唱えるが、ぼくは、そうじゃないと思う。国家を復権させ、強い国家のもとで

多層的なFTA網が進んでいる。そのなかで何が起きているかというところはまだ見えない。個々の現実を積み上げてみていくしかその全貌は見えないだろうし、TPPもこうした大きな網の一部と捉えないと本質を見間違えるだろう。

けかかって機能しなくなっている。といって世界経済を律する秩序があるかというでもない。WTOでダンピングの禁止はあるが、このシステムも壊れかけている。このように無政府的に経済が動いているのがグローバル資本主義だろう。いま進められている自由貿易協定(FTA)は、その無政府性をより助長しながら、マルクス、エンゲルスが書いた初期の資本主義の暴力性を体現している。かといって国家はなくならない。国際金融が破産に瀕すると、その破綻を国家が引き受けて、どんどんお札を刷って金融資本を救済していく、という国家と資本の新しい関係が生まれてきている。

多国間の自由貿易協定だけでなく、さまざまな数に上っている。FTA(自由貿易協定)先日、タイの農民運動リーダーであるバムルン・カヨタさんが来日した際、彼を囲む勉強会をしたが、タイの農民にとって一番問題なのは、ASEANの自由貿易圏をどうするか、ということだった。前大統領タクシン時代に、中国、オーストラリア、ニュージーランドとFTAを結んでいる。さらにASEAN+α、それらを囲む大枠としてTPPがある。

また、EUと各国の自由貿易協定も、さらに米国の協定もある。このように、めまぐるしく重層的

「いちば」の民衆交易

では、民衆交易はもうひとつの道になりうるのか。なるとしたらどのような形だろうか。

現在の大量生産・大量消費社会では、共同体や家族がばらばらに壊れ、構造的差別のなかで奪奪される関係が生まれている。自然、暮らしを無視した世界に対して、オルタナティブは言葉通り別の形でなくてはならない。多様性や協働性を大切に、単一でのつべらぼうな世界ではなく、地域・村・協同組合といった小さくても多様な試みが手を取り合う形。国家と地域を逆転させるようなことが必要ではないだろうか。自然を収奪し、商品化するのでは

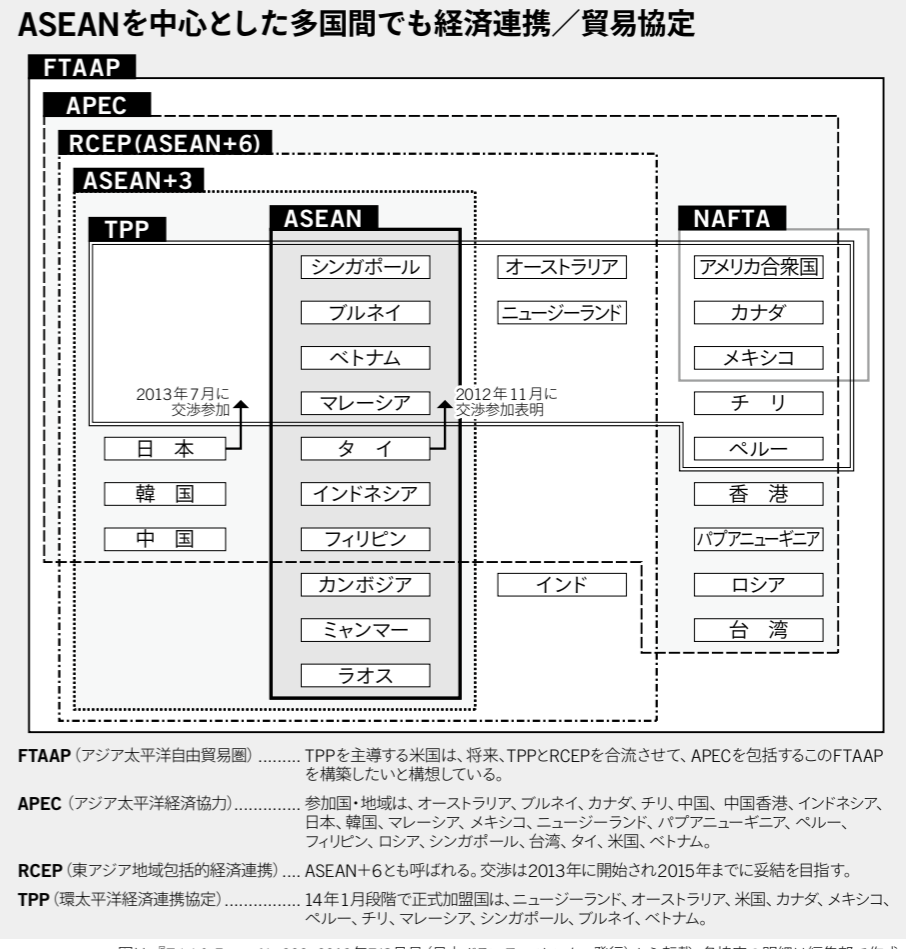
なく、人と人、人と自然の関係・協働を新たに作り出すこと。それをどのような概念としてとらえるか。脱成長というのもひとつの考え方だろう。

では、交易とは何か。経済民主主義と分配の平等性というフェアトレード運動がいう公正な関係を、かつての世界の捉え方ではなく今

の世界の中で、どう取り戻していくのか、がひとつのかぎになる。

また、世界を席巻する自由貿易に反対するならば、保護貿易が答えとなるか。右派の経済学者たちは、「TPPは関税自主権を壊す。これは亡国に向かう。(だから保護貿易)」と唱えるが、ぼくは、そうじゃないと思う。国家を復権させ、強い国家のもとで

多層的なFTA網が進んでいる。そのなかで何が起きているかというところはまだ見えない。個々の現実を積み上げてみていくしかその全貌は見えないだろうし、TPPもこうした大きな網の一部と捉えないと本質を見間違えるだろう。



アグリビジネスに 対抗するために

印 鈴 智 哉 / いんやく・ともや
(株)オルター・トレード・ジャパン政策室長



世界の実側の農民と繋がるために

ふたつめは、大豆。大豆は日本の食文化の中心にあるが、日本人は大豆がどのように生産されてきたか関心を持つ人が少ない。戦前でさえ国内生産は2割程度しかなく、ほとんどが中国東北部、朝鮮

がある。世界の裏側に生きる農民たちとどうとも歩むべきか。そうした活動の方向を政策室のひとつの柱として考えていきたい。

食料主権を守るネットワーク！

3つめの柱は、国際的な食料主権を守るネットワークを創ること。現在、自由貿易交渉で大問題になっているのが、農民が収穫の一部を翌年に撒く種として保存するという古来からの営みを犯罪として取り締まる法律の制定が南米、アフリカ諸国に強制されていること。南米やアフリカでは多くの農民が自分たちで種子を保存しているが、こうした法律は、農民が企業から種子を買わなければ農業をできなくしてしまう。種子会社は遺伝子組み換えを押し進める企業が独占しつつあるので、結局、世界の農業生産がモンサント社らに独占されかねない。

しかし、昨年メキシコではこの種子会社を利用する法案は大きな反対運動によって潰された。コロンビアでは法律が施行されたが、農民の全国的な反対運動に労働者や学生が呼応して、同国政府はこの法の施行を2年間凍結した。さらにアグリビジネスによる農業生産の支配が強められることに対して、アグロエコロジーという運動が南米を中心に大きなうねりとなって

粉ミルクに入っているGM大豆の割合を示す。映画『genetic roulette』より。



半島で栽培されていた。戦後は米に依存するようになり、80年代以降は南米にも生産拠点を求めている。大豆は単位面積あたりのタンパク質が高いため、戦略物資として世界中の畜産業が飼料を大豆に依存するようになった。現在は、世界の大豆生産の8割近くが南北アメリカ大陸に集中し、さらに96年以降、それらの大豆のほとんどが遺伝子組み換え(GM)になり、モンサント社の支配が強まっている。

南米の大豆生産現場では何が起きているのか？ それはまるで隠された戦争のようだ。ベトナム戦争を思わせるような環境破壊・健康被害、先住民民族・小農民の抑圧が続いている。

アルゼンチン、パラグアイは農地の6割が大豆プランテーションで覆われている。でも彼ら自身は大豆を食べない。ほとんどが家畜飼料やバイオ燃料になる。GM大豆のプランテーションの風景は、パイロットとコンバイン運転手だけで農民のいない世界。かつていた農民たちは焼き撃ち、農薬噴霧や銃による脅迫で土地を追い出された。パラグアイでは年間9万人が土地から追い出されているという。周辺の町では、白血病やガンなど、様々な病気の発症が伝えられている。実験でもGM飼料で育ったラットや豚に、変形や胃の炎症などが報告されている。

では人体への影響はどうなのか？ 96年にGM大豆が登場するが、米国での糖尿病患者の数は9年から急増しており、そこに因果関係を指摘する人が増えている。除草剤グリホサートの使用量と自閉症の子どもの数の関係、B.T.コリン(虫が食べると腸を破壊して虫を殺すバクテリア)と腸疾患の関係なども同様だ。企業側は、哺乳類には影響はないと発表しているが、長期的な科学的調査はなく、安全性には大きな疑念が突きつけられている。英国では13年4月、最大手スーパーTescoが鶏肉・鶏卵にはGM

飼料を使わないというそれまでの方針の放棄を発表した。穀物商社も非遺伝子組み換え大豆の取り扱いをやめる動きが本格化している。今後のGM作物は今までよりもっと危険になる可能性が高い。なぜかといえば、モンサント社のグリホサートが効かない新種の雑草が出現しているからだ。今年、米国の環境省は、除草剤ラウンドアップの残留許容量を大幅に引き上げたが、これはラウンドアップが効かなくなってきた分、使用量が減ってしまい、許容量を上げなければ売れなくなってしまうということが背景にある。さらにラウンドアップだけでは手に負えず、ベトナム戦争で使用された枯れ葉剤までが動員されようとしている。

これに対し、市民による大反対が起こり、未だ米国では承認されていないが、日本政府はどっくに承認してしまった。南米で枯れ葉剤耐性GM大豆が作られれば、将来、日本市場に入ってくることになる。家畜の飼料や加工食品については表示義務がないので、日本列島の住民は知る術もなく、それらを食べるといふ事態が起きてしまうだろう。

ブラジルではモンサント社が種子会社を次々に買収したが、一方で遺伝子組み換えに反対する運動も生まれている。ブラジル非遺

きている。これは先住民民族や小農民による伝統的農業に革新的要素を見出した学者とアグリビジネスと闘う運動が合流したもので、科学であると同時に実践的運動を展開している。Via Campesinaという国際的な小農民運動団体がアグロエコロジーをその運動の基軸にしたことで、世界にも大きく広がつつある。世界食糧機構(FAO)も、Via Campesinaと連携し、単一農業(モノカルチャー)をアグロエコロジーに変えていくことこそ至急に求めるべき、と提言している。アグロ

エコロジーは、企業による食料生産支配から小農民や消費者の食料主権と農業を取り戻すことをめざしている。実際に、GM作物のモノカルチャーとファクトリー・ファームは、交通で排出される合計より多くの温室効果ガスを排出し、気候変動を激化させている。そうしたことのオルタナティブとしてもアグロエコロジーは解決策であると思われるように至っている。

大野和興さんの発言に共感したのは、食料主権といったときにナ

大

野さんと印鑰さんの話はとても刺激的だった。山形県白鷹町の自分の見える範囲から、遺伝子組み換えと農業の問題について言えば、汚染度はかなりひどい。私の家も平飼いの養鶏をやっているし、周辺には牛を飼っている人も多い。非遺伝子組み換え飼料と指定されているものを買っているが、おそろく遺伝子組み換えが混じっているだろう。日本全国の生産者が同じ問題を抱えていると思う。農民が良心的に肉や卵を作っても完全に阻止できない現実がある。

私が白鷹町に住み始めた頃、畑で一生懸命草取りをしていると、



遺伝子組み換えを推進する企業が広告につかった地図「大豆王国」

伝子組み換え生産者協会(Adhara)が農牧研究公社(Ciudadana)などと協力して「自由な大豆」というプログラムを開始しており、遺伝子組み換えでない大豆を生産する農家も少なくない。ブラジルは現在も、非遺伝子組み換え大豆の世界最大の生産量を誇っている。

穀物メジャーに食料生産を任せたいれば小農民はほとんど排除され、モンサント社に支配されていってしまう。一方、日本の商社の中にはアフリカで自分たちの支配力の及ぶ農園を確保しようとする動きもある。例えば、ODA(政府開発援助)を活用してプロサバナ事業を始め、モザンビークで大規模大豆農園を作るために土地収奪に加担してしまうことが懸念されている。

企業に食料主権を奪われ、企業で作るものを買わされている今のシステムに対して、食料を作る権利を小農民に取り戻していく必要

シヨナリズムに吸収されてはいかないということだ。小農民の権利、消費者の権利、自然の権利、アグロエコロジーの観点から見ると、それらはひとつにつながっている。国際的な食料主権を守るネットワークを創っていきたい。

〈注1〉青少年の教育問題に取り組むドン・ボスコ司教区青少年センターが前身だったが、現在は貧困問題を解決するために持続可能な農業に取り組む大手バナナプランテーションの労働者の権利や土地問題、さらに農業の空中散布反対の活動も展開している。農民たちで買い上げた土地で有機農業の実践研修を行い、農産物の国内販売も取り組んでいる。

〈注2〉安い肉を作る工場式畜産。

農村地域をどう再生していくか

—東北の現場から

疋田美津子 / ひきた・みつこ
農業、APLA共同代表



近所のおじさんがきて「これを使えば一発」と見せてくれたのがラウンドアップという除草剤だった。いわゆる環境保全型農業をやっている人でも田畑の雑草駆除はかなりの農業に頼っているのではないだろうか。

自由化による疲弊

先日、生活クラブやまがたや反TPP運動の人たちと映画「世界が食べられなくなる日」の上映会を開催した。すでに入り込んでくるGM食品とこれからやってくるTPPに呆然自失してしまった。しかし、地域の人たちを見ると、全く危機感がない。無意識になる

べく考えないようにしているのかもしれない。

今、地域はグローバル化の動き以外でも荒廃がすすんでいると痛感している。私が山形で農業を始めた20年前は、GATTウルグアイラウンドが大問題だった。100%自給だった米が関税の自由化でミニマムアクセスになった時期だった。それから20年経ってTPPでその関税を全部とっちゃうという事態になっている。すさまじい動きだ。白鷹町も20年前に比べると人口は3000人減って、

現在は1万5000人。数年前に農業就労人口が半分になってしま。校はもうすぐ1校になってしま。飼料が高騰し、町内の酪農家の多くが経営破綻に陥り、かつて60軒いた酪農家が半減した。でも残った仲間の中には、外から飼料を買おうではなく、米農家と連携して、稲わらを牛に食べさせ、牛糞で堆肥を作って田んぼに戻すやり方に切り替え、今でも酪農を継続している人もいる。

90年代に2万円を超えていた米価が今は1万2000〜3000円。まさに自由化の結果であり、今後さらに農民は減り、少子高齢化が進むだろう。

具体的な実践を何重にも創りだそう

このような状況でも、今、希望が見える現象も起きている。そのひとつは直売所だ。私が所属するノラの会も出荷している「土里夢館」という直売所は年間売り上げが今年3億円に到達した。3・11以降は仙台のスーパーからも買付けにくる。3億円という金額は、白鷹町の農業者が農協を通じて売りに上げているのとは同額と言われている。さらに、最近、都会に出ていった若者がUターンして農業をする、というケースも出てきている。世の中の貧困化にともなう、派遣労働より農業の方がマシと思えるようになってきているのだから、こうした若者に門戸を広げる努力をしなければ、今後新しい流れが起きるかもしれない。

大野さんが紹介した、韓国の農民女性の話や豆腐屋の話はおもしろいと思った。既存の資本主義システムとつきあっているとよいことではない、と常に感じている。そこで奴隷状態が生み出されていくのなら、そうではないシステムを準備していかなければいけない。遺伝子組み換えにしても原発にしても、システムとして面で押し寄

せてくる。それに対して、一人の努力だけでなく、私たちのシステムや面をどう準備していくか。それも世界的に。その過程でAPLAがどのような活動をするのか？白鷹町の私が何をやるのか？具体的な実践を創り出すことが確実だし、それしか答えがないと思う。山形では、森林がかなり荒廃している。白鷹町の面積の65%は森林で、民有地も町や国の所有地もある。戦後、広葉樹林を伐採して杉を植えてしまい、手入れがゆきとどかないまま密林状態になっている。だから今年のような豪雨が来ると、杉が根こそぎ流されたり、山に放置されたままの間伐材が流されて、河川が詰まり、氾濫した。今年の被害は白鷹町だけで100億円にも上った。山は代々生産の場所として生活と深く関係して存在してきたが、高齢化や経済価値がなくなつたため、世話や管理がされない。こうした山をこれからどのように再生させていくか。同様に、すでに農業汚染がひどい農業をどう変えていけるか。そういう地域の課題と民衆交易はどう結びつくのか？



ノラの会のメンバー。(前列右端の加藤秀一さんは、2月18日に肺がんでお亡くなりになりました。ご冥福をお祈りします)

るうちに具体的な一歩を踏み出さなくてはならない。隣の町で農業をやっている菅野芳秀さんは「置賜自給圏構想」を呼びかけている。病院や保育園など地場産の農産物を結び付けていく構想で、農産物だけでなく、町に暮らすさまざまな人がそれぞれのやり方で農業生産に関わるというもの。白鷹町の

農業就業人口はすでに8%まで下がってしまったが、住民みんなが農業に参加し、自給的な暮らしを創っていけたら、めざすものに到達できるのではないか。自由貿易協定が何重にもなっているのであれば、こちら側も何重にも実践を重ねていく必要があると思っ

エ

スコープ大阪は「食の自給運動」をより強めるため、関西の生協連合会を解散して、2010年に生活クラブ連合会に加入した。私の所属するエスコープ大阪の前身である泉北生協が設立されたのは、70年代の高度経済成長期だった。地域生協として班共同購入システムを作り、店舗も作ってきた。

エスコープ大阪の主要な消費材は、生産者と共に開発したオリジナル品種の豚肉で、飼料は非遺伝子組み換えを使用しているものの、母豚のエサに関しては難しくなってきた。畜産飼料の遺伝子組み換え問題については、食べる力の結果がないと後退せざるを得ない状況にきている。オーストラリア産の非遺伝子組み換えの菜種、米国産トウモロコシについては、生活クラブの組合員も一緒に契約

地域の社会づくりが豊かになる民衆交易を

奥 万里子 / おく・まりこ
生協エスコープ大阪理事長、APLA評議委員



で行って、5年先まで確保できたが、その先はわからないという状況。地場野菜については、地場生産のみならず、種の自給を目的に大阪の固定種を作付けしてもらおうモデル実験に取り組み、今年から本格始動する。食料主権の観点からグロバルとローカルの両方を意識して消費の力を結集しなければ、巨大資本に飲み込まれ、「食の自給方向上運動」は埋没してしまうと感じている。

消費者が生産に関わる

遺伝子組み換えのようなグローバルな波に立ち向かって地域を大事にしながら何をすすめていくのか。私たちは生活クラブに加盟して、消費者が労働に参加する仕組みに感激した。消費者が生産に関わるということだ。そうしないと国内農業を守れない。トマトケチャップやトマトジュースの加工についても、長野県で大勢の組合員が収穫労働に参画する



エコシュリンプの生産者と一緒に、エビ料理を作りながら学習交流するエスコープの組合員たち。

機会を持つている。5年前にエスコープと養豚業者が出資して精肉加工会社を作った。豚の解体ワークショップを通して、スライスした肉しか知らない私たちが命の営みをいただいていることを体験し、生産現場を理解する訪問交流も続いている。食のことだけではなく、阪神大震災の後、少子高齢社会に向けて、組合員の助け合いを事業



この座談会は2013年10月22日に収録されました。

化して、ホームヘルパー養成、高齢者の訪問介護、障害者のデイサービス、学童サービスタなど、福祉事業に力を入れてきた。

民衆交易はバランゴンバナナから始めたが、フィリピンとの交流に学びながら、この10年間、韓国の唐辛子生産者とも組合員だけでなく日本の生産者も一緒に連帯・交流を深めてきた。

バナナの学習会は年に1回ほど実施し、90年代には絵の交換会をネグロスの子どもたちとした。2012年のバナナ生産者との交流では、4歳のときにネグロスを訪問した高校生も参加した。農業の高齢化がすすむなかで組合員と一緒にネグロスに訪問した2代目生産者もがらばっている。

生協というのは共同購入事業だけでなく、組合員がダイナミックに動けるのが特長。社会問題に對峙して脱原発、生物多様性の保全、子育て応援などに大勢の組合員が参加し、社会問題を自分の問題として捉えなおすことが必要だ。民衆交易が物語っていることは地域自立運動であり、人のつながりのなかで何ができるか、ということを常に意識してきた。私が地域理事をしていたときに「サリサリストア」という催しを開催した。町に駄菓子屋さんがなくなっていくなかで、コミュニティを大事に

ということである。ケアについてはアジアの方が日本より日常的に進んでいる面があるが、ネグロスでの活動は、食料とエネルギーの自給を実践する段階に来ている。そういう意味でも私たちがめざしていたことは間違っていない。だが、25年前の状況と今の社会的現実が大きく変わってきているため、それを位置づけ直すこ

しながら、車で10分の距離にいる野菜生産者に来てもらい、カフェをしたり、子どももスタッフに入ってもらった。エスコープの多様な活動の入り口をつくる楽しい取り組みだった。生協のミッションは社会問題を提起し、自分たちと共にアクションを起こしていく仲間を増やすことだと思う。子どもたちの未来、そして自分の老い方の視点を常にもって。

足元から代案を ポコポコ作りたい

しかし、生協が立ち上がった初期と現在の状況は大きく変わった。地域でエスコープの話をして、浮いてしまえば全然広がらないという問題に直面している。以前は「ちょっとくらい高くても安心できるなら買うわ」という人が多かった

が、今は、「よいのはわかるけどうちの年収では買えない」という人が増えている。生協の次世代を担う人たちが、こうした現実に向き合うか。

私は、若い将来を担う組合員をネグロスに送り出したいと思う。自分たちの地域での活動を俯瞰して見られるようになったことだからだ。食の国内自給は大切だが、それを国際的な関係のなかでどう考えるのか。相手の経済的・社会的自立に向けた課題も共有しながら、お互いがWin-Winになれる関係をどう作ることができるか。命を脅かすことには、しっかりと反対して、その代案を見出ししていくこと。自分たちの足元でポコポコ作りたい。そういう意味で、APLA/ATJの取り組みは、一方

日 本ネグロスキャンペーン時代を含めて、APLAとATJが活動してきたこの25年余りの活動は、失敗も多くあったが、そこから見出した方向性はおそらく間違っていない。その方向性とは、今日も皆さんが語られたように、小さな自給的共同体、すなわち、食料、

自給的共同体をめざして — APLA/ATJへの提言

秋山眞兄 / あきやま・なおえ
APLA共同代表



エネルギー、福祉(ケア)の自給を柱にした地域をどう創っていくか

的に支援するというより、お互い対等に問題に立ち向かい、解決していこうという姿勢をとっていることがよくわかる。これまでの方向性は間違っていないと確信している。あれこれ模索しながら市民に広げていきたい。APLAの活動はアジアの農民の生産・流通・地域づくりを試行錯誤するプロセスをリアルに共有できる。APLAに期待することは、日本の若者が自らの地域づくりに参加することのきっかけを作る媒介の役割だ。民衆交易が生協内にとどまらず、バナナを介して学生や社会人と知り合い、地域の課題解決のために人びとが寄りあって、地域というステージで社会づくりが豊かに繰り広げられることを願う。■

〔注〕生活クラブでは、食品や生活雑貨を「消費材」と呼んでいる。

とが重要だと考えている。例えば、現在、ATJで議論されていることのひとつに、パプアのチョコレートの問題がある。それは、地域内の市場をどう捉えるかを考えると、バナナやエビより遥かに難しい問題と思われる。大野さんの言われた「いちば」をどう創るか、にも関連する問題だ。ネグロスからマスコバド糖やバナ

ナを輸入する際、島内流通をどのようにしていくかという課題があった。しかし、これまでそれを追求することがなかなかできなかった。が、ようやくこの7月から現地のオルター・トレード社(OTC)が新規事業として宅配を始めた。まだ規模はとも小さいし、それに参加できる層はほんの一部で、少なくともATCに勤めているくらいは経済力がないとできない。東ティモールのコーヒーやパプアのカカオについても、日本との民衆交易だけで地域自立がどうにかできることではなく、地域内の「いちば」をどう創っていくかと連動させていかなくてはならない。それには、現地の人たちの主体性を大切に生かしながら、日本の私たちに何が

できるのか。こうした課題を今議論している。

もう一つ民衆交易の新しい試みとして、ATJの民衆交易品と日本国内でがらばっている農民の生産物をうまく組み合わせた新しい商品を開発できないかという試みをスタートさせている。例えば、パプアのチョコレートと山形の米生産者グループが作るお米を使っている。ポルチーノの開発を始めるようとしている。小さな規模なので、どう成り立っていくかは未知数だが、こうした試みによって新しい「いちば」を生み出すことができるかということを含めて、今後、面白い方向に向かうのではないかと考える。

若い人たちに何を伝えるか

APLAの理事や評議員の中には、大学の先生がたくさん関わって下さっているが、若い人にもどう伝えていくかという問題がある。例えば疋田さんが山形で感じている現実をどう伝えるかと同時に、そこにある事柄を思想的・倫理的に捉えるようにすることが、とても重要だと思う。若い人たちの多くは、変えることができるにもかかわらず、簡単にあきらめてしまいう傾向が強い。今、正規雇用が5割そこそこになって社会の競争に加わることで、はなから

切り捨てられるという事態がすすんでいるにもかかわらず、「自分は幸せだ」と感じているパーセントは過去最大になっているという。国家や政府や企業があれだけ嘘をつきまくっているにもかかわらず、若い層が怒らないことが気になる。福島原発について言えば、放出されたセシウムが1割に減るには、あと100年かかる。それは今後3代、4代先のことだ。しかも廃棄物処理の方法はならん確立していない。それなのに原発再稼働、輸出をするという。1945年の敗戦のとき以上の最悪の事態になっているのに、多くの人は平然としている。歴史的にこれほどの退廃はないのではないかと。APLA/ATJは、今後も民衆交易事業はもちろん、たくさんの小さな共同体、地域づくりを日本、アジアで創っていくことに力を注ぐことが重要な課題であるが、APLA/ATJの活動・事業を始めた動機と目的を踏まえれば、同時に若い人たちに思想的・倫理的なことを伝えることも重要な課題ではないかと感じている。私個人としては、田中正造没後100年、宮沢賢治没後80年である今年、彼らの思想を改めてとらえ返し、APLA/ATJの役割・目的や活動・事業と絡めて明確に伝えることができればと思っている。■

シリア内戦の下で — イラクに流れ出すクルド系難民たち

佐藤真紀 / さとうまき
特定非営利活動法人 日本イラク医療支援ネットワーク JIM-NET 事務局長



生まれた赤ちゃんと対面するヤーセルさんと妻のルウェイダさん。

シリア内戦終結のめどが立たず、私たちの活動している北イラクのアルビルにも難民があふれ出した。イラク戦争前はクルド人の小さな町だったアルビルは、戦争の影響をほとんど受けずに、治安がよくビジネスの拠点となっていた。オイルマネーも流れ出し、5つ星ホテルやモールが建ち、「第二のドバイ」と半ば冗談のように言われていた。そんな町にクルド系シリア難民が押し寄せたのだ。

イラクに流れた難民たち

難民たちは、3つに分けられる。まずは、難民キャンプで暮らす人たち。ここに収容されれば、最小限の衣食住は何とかなる。あつという間に13のキャンプがイラクのクルド地区にできていく。しかし、テント生活はみじめで、街中から離れた砂漠にあり、仕事を探しに街に行くのにもお金がかかる。

のある難民や、モールやレストランで職を得て、職場の準備した宿泊所に入り、シリアに残った家族に仕送りをする若者などだ。安く使われる出稼ぎ外国人労働者に近い。しかし、最近では難民の数が増えて職に就けるとも限らず、家賃も高くなり払えなくなつて途方に暮れている人びとも多い。そして3番目が、ホームレス難民だ。ほとんどは、激戦地のアレッポから逃げてきた人たちで、怪我をした人もいる。日雇いの仕事や物乞いをするのに、人目につく路上や、空き地にテントを張って、それを見た通りすがりの人が、支援物資を持ってきてくれる。その一方で、「どうせ彼らはシリアでも物乞いをやってきたのだから」と厳しい目も向けられはじめている。

ヤーセルさん一家

2013年5月、モールの前に数家族のシリア難民がテントを張って暮らした。2週間前に逃げてきたヤー

セルさんは、「化学兵器を使っているという話を聞いたので逃げてきた」という。妻のルウェイダさんは、妊娠9カ月の身重で国境を越えなければならなかった。5カ月前にアレッポで産婆さんに診てもらったときりだという。ヤーセルさんは仕事が見つかったばかりで昼間は動けないため「言葉もうまく通じない」不安なルウェイダさんを僕たちが検診に連れて行くことにした。超音波検診機のモニターに映る元気な赤ちゃんの姿を見てルウェイダさんはとてもうれしそうだった。しかし、警察がテントの立ち退きを命じているという。クルド自治政府は、難民はキャンプに収容する方針だ。ルウェイダさんは、病院から戻ると大きなおなかで気丈にもテントの後片付けを始めた。近所の人たちも手伝ってくれ、トラックの荷台に5人の子どものせて、別の住処を求めて去って行った。

その後家族は、住宅街の建設中の建物に住み着いていた。ヤーセルさんは、身元保証人が見つからず職場を首になった。息子のアハマッド君(11歳)を連れてシリアに戻ったが、家は半壊して住める状態ではなかったという。避難所になっている学校で寝泊まりをしていたが、爆発音がし、遊んでいたアハマッド君は腕に大けがを負ってしまった。そのため、また国境を越えてアルビルに戻ってきたのだという。2年も学校に行っていないからるくに自分の名前すら書けない。シリアに残してきたヤーセルさんの兄と息子はアルカーイダ系の組織に人質として拘束されてしまった。弟は、政府軍の検問で止められて銃撃されたが、幸いにも弾が当たらずにその場を逃れた。

ルウェイダさんは、JIM-NETが契約したクリニックに何度か連れて行き、6月29日に無事に男の子を出産できた。「ドクターが親切にしてくれましたので、安心して出産できた」と振り返る。

年末、雨が降り始めたころ、赤ちゃんは無事に育っているだろうかど気になって見に行くと、彼らがいたビルはもぬけの殻になっていた。一体どこに行ったのだろうか？

JIM-NETは、難民という困難な社会状況にあるシリアの妊産婦さんに寄り添って支援を続けている。■

「痛み」を通して一歩踏み出す

— APLA福島ツアーに参加して

近藤有香 / こんどうありか
武蔵大学4年生

福島に行ったのは初めてだったのですが、そこで見聞きしたこと、全体的に「痛み」を感じる体験でした。

1日目は、あすなる保育園、真行寺、二本松有機農業研究会、2日目は、岳温泉周辺の酪農家の人たちのお話を聞きに行きました。色々な立場の方の話聞き、感じたことは、「福島で生活している人たちを、福島のひと」と一括りで捉えられない、捉えてはいけない」ということと「自分には何ができるのか」という二つです。

いま振り返ってみると、私は今まで福島で生活をする人たちに對して「かわいそう」「大変そう」など、どこか他人事で、自分勝手な思いを抱いていたように思います。しかし、今回初めて福島を訪れ、そこで生きる人たちに会い、その内情の複雑さ・深刻さに言葉も出ませんでした。なぜなら、同じ福島県の中でも色々な状況、立場、生き方、信念を持ったひとたちが生き

ていることを知ったからです。そして、それぞれ葛藤や不安、悩みを抱えながら生きていくことを知ったからです。

葛藤の中で模索する生き方に触れて

あすなる保育園では、園長先生、職員の方、保護者の方などの間で、あらゆる意見や要望などを互いに何度も話し合いながら、子どもたちのための環境づくりに尽力していました。真行寺では、子どもの健康のために自分たち大人に何ができるのか、何をすべきなのかを考え、お寺の近隣の人たちやお寺の保育園に関わるお母さんたちが話し合いを重ねながら、自ら除染作業を実施し、全国から集められた野菜などを分配していました。二本松有機農業研究会では、消費者と対話し、放射線物質の問題と向き合いながら、少しでも健康によい食べものを作るためのあらゆる努力がありました。岳温泉周辺の酪農家の人たちは、酪農業を辞めて自家発電装置を導入した人もいれば、

セルさんは、「化学兵器を使っているという話を聞いたので逃げてきた」という。妻のルウェイダさんは、妊娠9カ月の身重で国境を越えなければならなかった。5カ月前にアレッポで産婆さんに診てもらったときりだという。ヤーセルさんは仕事が見つかったばかりで昼間は動けないため「言葉もうまく通じない」不安なルウェイダさんを僕たちが検診に連れて行くことにした。超音波検診機のモニターに映る元気な赤ちゃんの姿を見てルウェイダさんはとてもうれしそうだった。しかし、警察がテントの立ち退きを命じているという。クルド自治政府は、難民はキャンプに収容する方針だ。ルウェイダさんは、病院から戻ると大きなおなかで気丈にもテントの後片付けを始めた。近所の人たちも手伝ってくれ、トラックの荷台に5人の子どものせて、別の住処を求めて去って行った。

いま使える資源でどうにか酪農を続けている人などいました。

それらは、目に見えない放射能と闘いながら、「子どもたちの将来のために、いま自分たちができることをしよう」という強い意志を感じるものでした。しかし、その内情は必ずしもポジティブなものばかりではなく、「あなたたちがやっていることは間違っているのではなか」という周からの批判があったり、逆に「自分たちがしていることは間違っているのではないか」という不安が付きまとうものでもあり、様々な衝突もあるようでした。それでも、その葛藤や衝突のなかで、よりよい生き方を模索し、何とか生きていくとする姿を目の前にして、私の中で「今までの自分の勝手な考え方はすごく浅はかだったな」という反省の気持ちと「自分に何ができるのだろうか」という気持ちが生まりました。

自分事としての福島

福島で生活をしている人たちがそれぞれに語ってくれた葛藤や悩みに対する共感の意味での「痛み」と、「自分は今まで、福島」という何もう知ろうとしてこなかった」という自分に対する反省の意味での「痛み」。この「痛み」は私にとって大きな一歩につながった



バナナ募金でバラゴンバナナ送付先であるあすなる保育園にて。

思います。「痛み」を感じることでできたおかげで、今までどこか他人事だったような気持ちですが、「それでは自分には何ができるのだろうか」という思いに変わったからです。今の時点で具体的に案はまだ見つかっていませんが、「福島」の見方は大きく変わりました。「自分事」としての福島になりました。ツアーから日が経った今でも、福島で出会った人たちのことを思い出すと、胸が痛くなります。しかし、今回のツアーでの体験できた「痛み」は大きな財産です。■

APLA 食堂

Kitchen APLA

03

オリーブオイルを使った アレンジレシピ

今日の
レシピ

赤石優衣 / あかいし・ゆい
大久保ふみ / おおくぼ・ふみ
APLA事務局
廣瀬康代 / ひろせ・やすよ
APLA理事



APLA食堂では、ATJ/APLAで扱っている食材を利用したレシピをご紹介します。手の込んだ料理も素敵ですが、もっと手軽に使っていただけるように、「誰でも簡単に作れる」レシピをお届けします。

本物のオリーブオイルの味を知っていますか？

野菜の味が引き立つドレッシング

今回は冬なので、温野菜にしてみました。下のレシピのように、うどんにかけても合いますよ。

塩麹&オリーブオイル【写真①】

【材料】※分量はあくまでも目安ですので、お好みで味を調節してください。

- 塩麹 大さじ10
- マスコバド糖 大さじ2
- オリーブオイル 大さじ5
- コショウ 少々
- レモン汁 大さじ5

【作り方】

1. 材料を全てフードプロセッサーに入れ、塩麹がなめらかになるまで混ぜればできあがり！

食べるドレッシング【写真②】

【材料】※分量はあくまでも目安ですので、お好みで味を調節してください。

- 長いも 150g
- めんつゆ 大さじ1
- オリーブオイル 大さじ2
- マスコバド糖 小さじ半分

【作り方】

1. ジップロックのような厚手の袋に皮をむいた長いもを入れ、めん棒で叩いて形が少し残るよう粗めに砕く。砕いた長いもにその他の材料を全て加え、よく混ぜればできあがり！

オリーブオイル風味の山かけうどん

玄麦うどんに絡めて美味しく召し上がれ。【写真③】

【材料】※分量はあくまでも目安ですので、お好みで味を調節してください。

- 長いも 150g
- 玄麦うどん 1袋(200g)
- オリーブオイル 大さじ1
- 塩・コショウ 適宜

【作り方】

1. 長いもは皮をむいてすりおろし、オリーブオイル、塩・コショウを加えてよく混ぜる。
2. 茹でたうどんにかけて、できあがり！



三里塚ワンパック野菜から届く全粒粉でつくった「無農薬 玄麦うどん」は、APLA SHOPでも販売しています。



精製されたオイルが混ぜ込まれているケースもあるので。ちなみに精製されたものには、オリーブオイルの健康効果である抗酸化成分もありません。

また、瓶詰めされた国が原産国となるので、よく見る「イタリア産」も、原料のオリーブの実は違う国でつくられたものかもしれません。オリーブオイルには、疑わしきところがたくさんあるので、

APLA SHOPのオリーブオイルは現地の

パートナー団体が組織した協同組合によってつくられています。収穫した実ではできるだけ早く搾油場に運搬し、風味を損なわないように果実ごとすりつぶして抽出しているので、オリーブ本来の味と香りが豊かです。このオイルは顔の見える関係を大切に、現地生産者の応援にもつながります。

撮っておきアジア

Totteoki ASIA

23

撮影者◎岩寄円 / いわさき・まどか
撮影場所◎ラオス



- 1 — ラオスの国花トクチャンパー。世界遺産ワットプーのまわりにもたくさん咲いており、遺跡に花を添えています。ラオス国営航空の機体にも描かれているラオスのシンボルです。
- 2 — 世界遺産ワットプーからの眺め。遺跡とそこから展望できる風景が世界遺産になっています。山の中腹にある本殿に行くには長い階段を登りますが、この絶景を見ると疲れも忘れてしまいます。
- 3 — ラオス第二の都市、パクセーの市場での風景。市場では野菜や魚だけではなく、カエルなどの珍味も売られており、とても刺激的な場所です。さすがにカエルは買いませんでした。
- 4 — 教育支援をしている小学校での一枚。小学校の校舎に入るなり、目を輝かせ私たちの元にやってきます。行くたびに子どもたちから元気とパワーをもらっています。
- 5 — 文化交流で折り紙を教え、完成した作品で楽しげに遊んでいます。とても気に入ったようで、次の日も学校に持ってきて遊んでいました。
- 6 — ラオスの朝の光景。仏教を信仰するラオスの人びとは朝の托鉢の際、お供えものを、幸せを願います。これはルアンパバーンでの托鉢の様子。

1	2
3	5
4	6



(2010年9月撮影)

このコーナーでは皆さまの写真を募集しています。

募集内容◎アジアを旅した写真5枚程度(日本も含まず) 詳しくはAPLA事務局(TEL:03-5273-8160)までお問い合わせください。皆さまからの応募をお待ちしております！

今回の雑学

今回使用したオリーブオイルは、APLA SHOPで扱う「パレスチナのエキストラバージンオリーブオイル」ですが、どのようなオイルのことをエキストラというかご存知ですか？
オリーブの実のみを原料として化学的処理をされずにつくられた、味や香りに欠陥が一つもないオリーブオイルのみエキストラと冠することができます。しかし、中には偽装表示によって化学的処理などで

【参考文献】 日経ビジネスオンライン <http://business.nikkeibp.co.jp/article/report/20121128/240263/>
トム・ミュラー著「エキストラバージンオリーブオイルの嘘と真実」(2012年、日経BP社)

